

目次／表紙 企画展「星にねがいを—宇宙といわたの年代記—」／p. 2-3 いわて文化ノート「地方支配の観点から「気仙隕石」落下一件を検討する」／p. 4-5 展覧会案内「第73回企画展 星にねがいを—宇宙といわたの年代記—」／p. 6 館長あいさつ「着任にあたって」／活動レポート「いつも上手くいくとは限らない調査の話」／p. 7 事業報告「岩手山の眺望～支障木の伐採～」／資料紹介「岩手県立博物館デジタルアーカイブから（民俗部門）」／p. 8 インフォメーション

企画展

「星にねがいを—宇宙といわたの年代記—」

令和7年6月14日(土)～8月17日(日)

場所: 2階 オザワ工業ぎゃらりー(特別展示室)



銀河鉄道が走る私たちのふるさと、いわて。宇宙と人との関わりという視点からその歴史をたどります。

■いわて文化ノート

地方支配の観点から「気仙隕石」落下一件を検討する

歴史部門 大銚地駿佑

はじめに

嘉永3年（1850）5月4日の明け方、^{おさべ}陸奥国気仙郡長部村（現在の岩手県陸前高田市気仙町）丑沢の長門寺境内に隕石が落下しました。この隕石が「気仙隕石」と呼称される日本最大の石質隕石であり、落下当時の様子が記録され、それが公式記録として残されている点で大変貴重な隕石とされます（熊谷2002、平凡社地方資料センター1990）。



気仙隕石(当館所蔵)

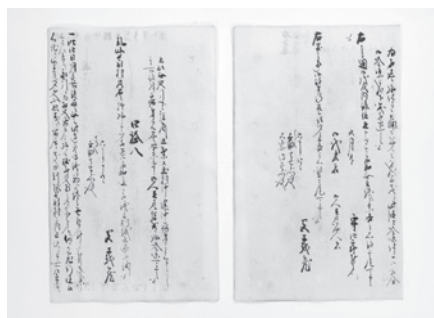
この気仙隕石について、その研究史も含めて詳細に論じたものとしては、岡田広吉の論考（岡田1978）を挙げることができます。この論考を手がかりに先行研究を確認すると、気仙隕石については、明治時代にさかのぼる研究史を有していることが分かります（新渡戸1890など）。そして、この岡田の論考以降も気仙隕石について論ずる成果が複数確認できます（西田1979、駒井2003など）。

隕石が落下した長部村は江戸時代に仙台藩領でした。同藩の地方支配の機構（千葉1983）は、奉行（藩政の最高責任者）一出入司（財政・民政の事務にあたる）一郡奉行（地方の行政を指揮監督）一代官（郡村に常駐し民政にあたる）一大肝入（大庄屋とも。原則的に代官所区

内に1名設置）一肝入（他地域の名主・庄屋に相当。原則として各村に1名設置）というものでした。

管見の限り、この隕石の落下を受けて、肝入や大肝入、さらには代官など藩が具体的に、どのような認識を持ち、どのように対応したのかという点については、これまで十分に検討されていないと考えます。そこで本稿ではこの点について検討することを目的とします。これは、地方支配の観点から気仙隕石落下一件を検討するものということができます。

1 隕石落下の第1報



吉田家文書、嘉永3年「定留」48番(個人蔵)

長部村を含む気仙郡の大肝入を務めていた吉田家の記録に気仙隕石落下一件が記されています（吉田家文書、嘉永3年「定留」48番。以下の本稿の検討にあたっては岩手県立図書館所蔵マイクロフィルム版を利用。また、史料名は「吉田家文書目録」による）。この一件の記録は、8つの文書を書き写したものの構成されています。そして、この8つの文書は大きく第1報系統と第2報系統に分けられます。本章では、5月4日の隕石落下後、最も早い段階で気仙郡大肝入吉田宇右衛門によって作成された文書に端を発する第1報系統の文書を分析します。

この大肝入によって作成された文書は、5月6日付けのもので代官宮沢義蔵に宛てた文書です。この文書で大肝入は隕石落下時とその直後の様子を報告していますが、次の通り大肝入のこの時点での認識・対応が判明します。

①私（大肝入）は差し支えがあり未だに見分もしていませんが、息子や手代など数人が見物に行ったところ、伝聞で得た情報と相違ないことを確認しました。

②不思議というほどのことでもないと思われ、表立ってお知らせするには及ばないのではないかと思われませんが、この辺りで石が降った言い伝えもないので、「御承知」のため報告します（「不思議^(議)と申程之義二も有御座間敷、表立御承知達二八及申間敷哉と奉存候得共、此辺二而石之降候聞伝も無御座候間、御承知二申上候」）。

③街道端なので御金夫たちが直接見聞きした上で口頭でも報告するよう申付けましたので、これを聞いていただきたい。

②からは「不思議というほどのことでもない」という大肝入の冷静な認識がうかがわれますが、彼は前例のない出来事であったため代官のお耳に入れるという対応をしたことが確認できます。

同日これを受けて代官は郡奉行守屋四郎左衛門に向けた文書を作成します。この文書では代官がいた本吉郡・気仙沼の隕石落下時の様子が報告されていますが、次の通り代官の認識・対応が判明します。

①石が落下した様子のほかに変わったこともありませんが、世の中で様々な根拠のない噂を言いふらす者もいるのではないということも見極められませんので、一応「御承知」のため報告します（「外二相替候義も無御座候得共、世上種々之雑説申触候者有之哉も難計候間、一応御承知二相達申候」）。

②この石を掘り起こすよう対応しておきましたので、長さなどを追って報告するようにします。

①からは、隕石落下時の様子以外に変わったことはないという、大肝入と同様に代官の冷静な認識がうかがわれますが、代官は流言に警戒し郡奉行のお耳に入れるという対応をしたことが確認でき

ます。

その後、5月9日に郡奉行が出入司とみられる伊庭宗七郎に「御承知」のため大肝入・代官の報告を伝達し、同日中に出入司、同月24日には奉行石母田勘解由（仙台郷土研究会2012,p.99）がこの報告を確認しています。そしてこの第1報系統の一連の文書は5月中には代官のもとに返却されています。

2 隕石落下の第2報

第1報系統の文書が代官の手元を離れて郡奉行以上の報告に供されている最中の5月7日、隕石が落下した長部村の肝入熊谷甚蔵が大肝入に文書を提出します。続いて本章では、この文書に端を発する第2報系統の文書を分析します。

この7日付けの肝入の文書では、隕石落下時の様子にも言及はありますが、主に落下した隕石そのものと落下場所の様子が報告されています。落下場所では近くの村や郡から見物人が数人集まり、隕石にキズなどをつけたとされ、そのため隕石を掘り起こして、長円寺の中で保管したとされています。注目したいのは肝入が大肝入に報告を上げた理由です。肝入はいよいよもって見物人が群集しているので報告しましたと述べています（「弥以見物人群集致申候間、旁々如此御披露申上候」）。肝入は隕石の見物人が群集していることに注意する認識を有していたことがうかがえます。

同日、これを受けて大肝入は代官に向けた文書を作成します。この文書で大肝入は、追々見物人などが来ているとのことで、珍しいことに起因して証拠のないことを言いふらし、人々の騒ぎに至るようなことがあっては済まないことなので、このようなことがないように取り締まるべき旨を村方に指示したことを報告しています（「追々見物人等罷越由二付、珍事二基付無跡形事忤申触、諸人之迷ひ二相至様之義有之候而者難相済事二候

間、右様之義無之様制道可仕旨村方二首尾仕候上、此段共二申上候」）。大肝入は流言が広がり社会秩序の混乱が生じることに警戒していることが分かります。

これを受けて翌8日、代官は郡奉行に向けた文書を作成します。この文書では「御承知」のため肝入・大肝入の報告を伝達するとされていますが、さらに代官は、今回のことは珍しいことと思われ、自然と見物の人々も寄せ集まるものと考えられ良くないので、このようなことがないように何分にも注意するよう申し渡したと述べています（「珍敷事二間得、自然見物之人数も寄集候ものと相見得不宜候間、右様之義無之様何分撮当可仕、尚又申渡候」）。代官も見物人が寄せ集まることに注意する認識を有していたことが分かります。

その後、5月12日に郡奉行が出入司に「御承知」のため肝入・大肝入・代官の報告を伝達、翌13日に出入司、同24日には奉行がこの報告を確認しています。そしてこの第2報系統の一連の文書も5月中には代官のもとに返却され、最終的には第1報系統の一連の文書とあわせて6月15日に大肝入に返却されています。

おわりに

以上の分析を総合すると、隕石の落下を受けて、肝入や大肝入、そして代官は、隕石や隕石落下という自然現象にも意を配っていないわけではありませんが、それが起点となる人為現象とでもいえるべき見物人の群集や流言、ひいては社会秩序の混乱に警戒する認識を持ち、地方支配機構の中で情報共有を図るとともに、人々に対して取り締まりをおこなう対応をとったとまとめることができます。

気仙隕石落下の33年前にあたる文化14年（1817）、江戸近郊の八王子と付近の村々に隕石が落下しています（「八王子隕石」）。この隕石の落下時の状

況などを検討した森融は、江戸では様々な噂話などが記しとどめられたと指摘し、江戸市中の騒ぎを耳にし、これを早く静めたいと考えた幕府若年寄堀田正敦が、トップダウンで、配下の天文方高橋景保に至急で調査を命じたとの推測を示しています（森2023）。この推測も踏まえると、支配を担う者たちが、隕石落下という未知ともいえる自然現象が起点となる人為現象に対して注意を払い、そして対応しようとする姿を広く見出すことができると考えます。

最後に、本稿執筆にあたり、岩手県立図書館、吉田裕氏、陸前高田市立博物館の協力を得ました。この場を借りて感謝申し上げます。

参考文献（紙幅の都合で副題等は省略）

- 岡田広吉「気仙隕石について」（『地学研究』第29巻 第7～9号、1978年）
 熊谷賢「気仙隕石」（岩手日報社出版部編『いわて未来への遺産 近世・近代をたどる』、岩手日報社、2002年）
 駒井健「隕石「気仙号」の秘密」（金野静一等編『岩手県の不思議事典』（新人物往来社、2003年）
 仙台郷土研究会編『仙台藩歴史事典一改訂版一』（仙台郷土研究会、2012年）
 千葉景一「仙台藩の地方支配機構」（渡辺信夫編『宮城の研究』第4巻 近世篇Ⅱ、清文堂出版、1983年）
 西田耕三編・宮城隆興監修『気仙天隕石物語』（三陸印刷株式会社、1979年）
 新渡戸仙岳「気仙鉞物略誌」（『岩手学事彙報』第179号、1890年）
 平凡社地方資料センター編『日本歴史地名大系第三巻 岩手県の地名』（平凡社、1990年、「長部村」の項）
 森融『八王子に隕ちた星』（平凡社、2023年）
 「吉田家文書目録」（『東北歴史資料館報』No.11、1980年）

■展覧会案内

第73回企画展 星にねがいを一宇宙といわたの年代記一

会期：令和7年6月14日（土）～8月17日（日） 会場：オザワ工業ギャラリー（特別展示室）

★序章 星にねがう



2011年3月11日の星空（宮城県仙台市宮城野区）
提供：3がつ11にちをわすれないためにセンター
（せんだいメディアテーク）

2011年3月11日の夜。停電により、街が闇に覆われるなか、星がいつもよりきれいに見えたことをご記憶の方も多いのではないのでしょうか。人はいつの時代も星空を仰いで、そこに様々な意味を見出してきました。

2021年に開催された東京オリンピックの終幕に当たり、「星めぐりの歌」が世界に響いたように、現代日本の宇宙観は、この岩手の地で生まれ育った宮沢賢治のそれに少なからず影響を受けています。

賢治の登場にいたるまで、イーハトーブの夜空の下ではどのような歴史が繰り広げられてきたのでしょうか。星々に導かれながら岩手の歴史をめぐる旅へ出発しましょう。

★第1章 星をまつる

「この人は毘沙門天の化身であり、来りて我が国を護る。」

征夷大將軍、あるいはアテルイのライバルとしてよく知られた坂上田村麻呂は、古代の高官の職員録である『公卿補任』のなかで、毘沙門天の生まれ変わりであるとされています。

国家の北進に反発する蝦夷を平らげ、

不安定な北^{ほくへき}の地に秩序をもたらした田村麻呂は、死後間もないころから、北天の守護者として神格化が進んだとされています。現在の岩手県域に毘沙門天像の優品が多く伝わっているのもそのような歴史的背景によるものなのでしょう。

より直接的に北の星との関わりの下で信仰された仏の一つが北極星、あるいは北斗七星の権化とされる妙見菩薩です。

興味深いことに田村麻呂が直接遠征していない秋田県や青森県域では、田村麻呂伝説と結びついた形で妙見菩薩が信仰されている事例が散見されます。

毘沙門天や妙見菩薩への信仰を切り口として、古代の人々の星への祈りが、現代に至るまでどのように展開してきたのか、俯瞰していきます。



さかんに妙見菩薩が信仰されていた興田神社（一関市大東町）に奉納された、安倍貞任所用の伝を持つ金銅製前立【岩手県指定文化財】

★第2章 星をまとう

奥州合戦において奥州藤原氏が滅亡すると、合戦で功を挙げた関東の御家人らは現在の東北地方の各地に所領を得ます。次第に彼らの一族などが現地に赴き、所領を経営するなかで、奥州の地に根をのばしていきました。

このようにして台頭していった中世武士団の一つに千葉氏が挙げられます。名字を専門に扱う業者の調べによれば、現在の岩手県内には、名字数のランキングで五本の指に入るほど、多くの「千葉さん」がいっぱいいるのだそうです。

千葉氏のルーツはやはり現在の千葉県域に求められます。源頼朝の挙兵を初期から支えた千葉氏は、鎌倉幕府において中枢の地位を占めるとともに、妙見菩薩を篤く信仰しました。現在の岩手県域に勢力を有した千葉氏の庶流は、その多くが近世を迎える前に滅びていきますが、彼らの足跡は妙見信仰とともに、本県南部を中心に見出すことができます。



紙本着色千葉妙見大縁起絵巻より妙見示現の場面（複製、千葉市立郷土博物館蔵）

近世大名へと展開していく南部氏や伊達氏もまた、家紋や武具の意匠に星を採り入れており、彼ら中世武士団の栄枯^{えいこ}をとおして、中世の人々の星へのまざなしのあり方を探っていきます。

★第3章 星をはかる

江戸時代にいたると、天下泰平の下で、諸学問が著しい発達をみせます。とりわけ実学奨励のために漢訳洋書の輸入が解禁されると、西洋の知見も視野に入れながら、日本の天文学は更なる発展と実践を重ねていくことになりました。

伊能忠敬による全国の測量と、その結果に基づくきわめて精度の高い地図の制作は一般にもよく知られていますが、岩手県釜石市唐丹町には、国内でも唯一、忠敬が存命中に築かれた、測量を記念する古碑が伝わっています。設立者は地元^{い のうただたか}の天文学者である葛西昌丕^{かさいまさひろ}。伊能の一大事業に共鳴する人物がいたという事実が、仙台藩領における天文学の成熟の一端を物語っています。

伊能の測量や製図には天文学の知識が不可欠であり、彼はその多くを、幕府天文方を務めた高橋至時^{たかはしよしとき}に師事することで会得しました。高橋至時と伊能忠敬、星を頼りに二人の師弟が成し遂げた偉業を、彼らが実際に使用していた道具とともにご覧ください。

国宝来県



測蝕定分儀（伊能忠敬記念館蔵、国宝）

★第4章 星にせまる

相馬大作^{そう ま だいさく}といえば、津軽藩主襲撃未遂事件が取りざたされることが多いですが、教育者としての側面も持ち合わせていました。彼が現在の岩手県二戸市内に構えた私塾^{た なかだて}に学んだ田中館氏のなかから、近代日本の科学の基礎確立に大きな功績を残す俊才があらわれます。

日本の学術界を背負い、「もう一つの月」とも称されるほど世界を駆け回った田中館愛橘^{あいきつ}は、緯度変化をめぐる国際的な観測ネットワークの拠点の一つを水沢に設ける道を拓き、弟子の一人である木村榮^{ひさし}をその所長に抜擢します。

木村榮が世界を驚かせたZ項の発見や、世界初のブラックホール撮影成功の物語は、いずれもこの臨時緯度観測所の設立からはじまったものでした。

岩手県奥州市水沢では、あちらこちらに「Z」の文字が掲げられています。その文字が意味するところは何なのか、その背景にある田中館愛橘・木村榮師弟のエピソードとともに、ぜひ展示会場でお確かめください。

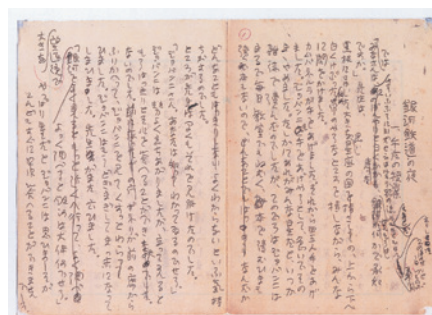


眼視天頂儀の前に立つ田中館愛橘（右）と木村榮（提供：国立天文台）

★第5章 星をめぐる

宮沢賢治は明治三陸地震津波の年に生まれ、昭和三陸地震津波の年に亡くなっています。これは偶然にすぎませんが、一方で災害やパンデミック、世界戦争など、彼が生きた時代は、社会が度重なる災禍に見舞われた時代であったことも事実です。それゆえに、賢治が死の闇と対にして差し出す星々は、一層その輝きを増して読者の目に映ります。

本展覧会では、さながら宇宙のように無限の広がりを見せる宮沢賢治をめぐる世界のなかでも、「銀河鉄道の夜」に焦点を当て、時代背景や、登場する天体、賢治の死後、戦火の中の水沢の地に見出される「ほんとうのさいわい」の一つのかたちなどについてご紹介していきます。



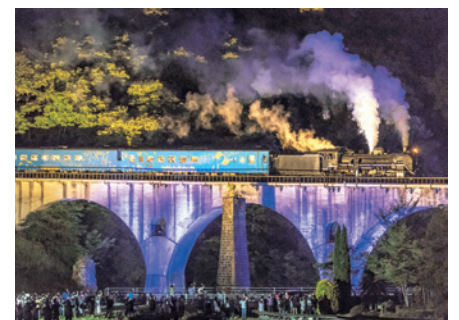
「銀河鉄道の夜」原稿（複製、提供：宮沢賢治記念館）

★終章 星といきる

東日本大震災発生後、復興への希望の一つの象徴としてSL銀河がイーハトーブを駆け抜け、賢治のふるさとである花巻市では、次の世代を担う高校生らが主体となり、宇宙による地域おこしが繰り広げられています。

田中館愛橘、木村榮らが水沢の地に蒔いた種は、ブラックホールの撮影成功という世界的な達成を支えるまでに成長し、現在はILC誘致の実現により、岩手から宇宙の始原に迫らんとする壮大なプロジェクトまでもが構想されています。

展覧会の結びに当たり、星とともに未来に向かっていく、現代の岩手の日常をご紹介します。2023年に惜しまれつつ運行を終えた、SL銀河のヘッドマークなども展示を予定しておりますので、どうぞこの機会をお見逃しなく。



SL銀河ラストラン（提供：東日本旅客鉄道株式会社盛岡支社）

★関連事業

企画展関連事業として、全4回の日曜講座、2回の展示解説会のほか、東日本大震災時の星空にまつわるドキュメンタリー番組の特別上映、8月2日（土）の夜に予定している星空の観察会など、多数のイベントをご用意しています。詳細につきましては各種広報物やホームページなどをご覧ください。

本展覧会が、この夏、皆様が星空を見上げる一つのきっかけとなれば幸いです。

（歴史部門 目時和哉）

■館長あいさつ

着任にあたって

館長 坂本 美知治

盛岡の北方にそびえる岩手山は、雪解けが進む4月上旬には、山頂付近に鷲が大きく翼を広げた姿を現し、春の到来を告げることから、別名を巖鷲山とも呼ばれています。この4月、通勤の車窓から毎日その雄大な姿を眺め、啄木同様、襟を正すような気持ちになりました。この度、前任の高橋廣至館長から岩手県立博物館長を引き継ぐこととなりました。歴代館長に名を連ね、館の運営を任されたことに、身が引き締まる思いであります。

岩手県立博物館は、開館以来、地域の豊かな自然環境や文化遺産、そして人々が紡いできた歴史や文化を未来へ伝える重要な拠点であり、地元の皆様はもとより、ご来館いただいた多くの方々のご支援により現在に至っております。その歩

みを受け継ぎながら、新たな時代に即応した博物館を目指し、館の運営に当たって参りますので、引き続き、ご支援、ご協力をよろしくお願いいたします。

さて、博物館法が70年ぶりに改正され、令和5年4月に「博物館法の一部を改正する法律」が施行されました。これにより博物館には、これまでの歴史文化・自然科学等多岐にわたる文化遺産の保存継承・調査研究・活用という基本的な役割に加え、教育や文化の域を超えて、まちづくり、観光、産業、福祉、国際交流など様々な分野と連携しながら地域社会の発展に貢献するなど、社会的・経済的な役割を担う施設となることも期待されています。当館においても、「温故知新」の言葉のごとく、従来の使命をしっかりと果たしながら、一方で社会の

変化やニーズを的確に捉え、社会に貢献できる施設へと変わっていくことが、今、求められているものと認識しております。

折しも令和5年には盛岡市がニューヨークタイムズ紙が選ぶ「2023年に行くべき52か所」に選ばれ、外国人も含め観光客が急増したほか、日本を訪れる外国人の数も年々増加傾向にあり、盛岡市内でも外国人の姿を普通に見かけるようになりました。博物館が国内外を問わず、多様な世代の方々が、共に学び、共に楽しめる場となり、地域社会を活性化させ、社会の知的財産の増進に寄与する、より魅力的な存在となるよう、職員一丸となって取り組んで参ります。ぜひ、岩手県立博物館にお越しください。

■活動レポート

いつも上手くいくとは限らない調査の話

当館考古部門では岩手県教育委員会と共同で、5カ年計画の「岩手における縄文期～古墳時代の墓制関連遺跡調査事業」を進めています。計画初年度の2024年秋には九戸村長興寺Ⅰ遺跡の発掘調査を行いました。ここでは発掘の成果、というよりも半分愚痴めいた失敗エピソードをご紹介します。

長興寺Ⅰ遺跡では2000年に県道改良事業に伴い（財）県埋蔵文化財センターの発掘調査が行われ、4点の完形土器が副葬された土坑墓が発見されました。この時代のお墓は尾根の上に複数並ぶ傾向があり「二匹目のドジョウ狙い」よろしく隣接地の発掘に踏み切ったのです。

結果は… 見事に空振りしました。ここぞという場所に狙いを定め、いさんでパ

ワーショベルも使い表土を掘り下げてみたら、巨大な穴に埋め戻された砂利と粘土の塊が広がっています。おそらく前回の調査後に何かの理由で土取り掘削が行われたもよう。一生懸命探した結果、かろうじて土取り跡の縁辺に土坑墓らしきものの残骸があり、一帯が墓域だったということはわかりましたが、期待していた成果には及びませんでした。

現在の当館考古部門学芸員（3名）は埋蔵文化財センター勤務歴が長く、嫌というほど密集する遺構、膨大な出土遺物に悩まされ続けた経験（トラウマ）を全員が持っています。緊急調査で期限間近の時にはなんぼでも出てくるくせに、今回のような時にはさっぱり… 世の中はそう甘くないぞと改めて実感しましたが、気を取り直し他の遺跡に狙いを変更して

作戦会議中です。さて次は目論見通りに運ぶでしょうか。担当としては「持っているか、そうでないか」の評価が決まりそうで若干の不安も。上手くいったらまたこの紙面などでご紹介します。

華々しく発表される博物館の調査成果の裏では、数多くの失敗があることを伝えたくて、あえて白状しました。



(考古部門 高木晃)

■事業報告

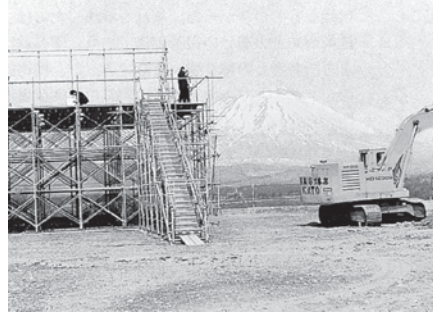
岩手山の眺望～支障木の伐採～

期間：令和7年1月～3月

この冬、博物館では周辺森林環境の改善を目的に支障木の一部伐採を行いました。博物館建設から40数年が経ち、最近では生長を続けた樹木の倒木や落枝の危険性が指摘されていました。また、敷地内の遊歩道は木々が鬱蒼とし薄暗く、ちょっとした怖さを感じるほどでした。暖くなれば近所の保育園児をはじめ、多くの方々が散歩に訪れる場所です。予測される危険に対し速やかな対応が求められていました。

伐採はもうひとつのメリットをもたらしています。それは岩手山の眺望です。2階グランドホールから見える岩手山は当館自慢の展示のひとつです。その眺望も生い茂る樹木によって年々狭まりつつありました。博物館建設当時（図1）と昨年（図2）を見比べるとその違いは一

目瞭然です。



(図1 1978年4月17日撮影)



(図2 2024年5月29日撮影)

岩手県立博物館は、「岩手山を望める丘のミュージアム」というコンセプトのもと設立されました。岩手山の眺望を維持していくことも大切な使命だと捉えています。今回の伐採範囲もまだごく一部です。引き続き事業の継続を検討していきますが、ただ闇雲に伐採するのではなく周辺環境の改善を第一に考え計画的に実施していきたいと思います。



(図3 右側が伐採範囲2025年5月8日撮影)

(企画課 佐藤修一郎)

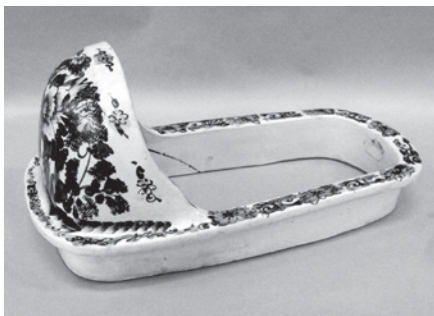
■資料紹介

岩手県立博物館デジタルアーカイブから

当館には、30万点をこえる資料が収蔵されており、そのデータは非公開のデータベース上で管理されています。そのうち約1,300点は「岩手県立博物館デジタルアーカイブ」として、当館ホームページ上で公開されています。

その中から、今回は民俗部門の資料を紹介します。

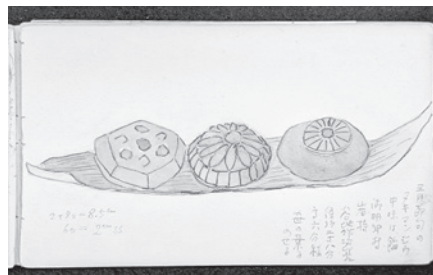
【大便器】



ある日のこと、職場の机の上に置かれて

いた小判型の大便器です。当館考古担当学芸員が所有者の承諾を得て紫波町南日詰で採集したもので、前方部に「山形」の刻印があることから平清水焼と推定されます。コバルトブルーの花文様が美しい一品です。

【森口多里スケッチ帖】



森口多里〔明治25年（1892）-昭和59年（1984）／水沢（現奥州市）生まれ〕は大正時代から戦前にかけて美術評論家として活躍した人物です。北上市

への疎開を機に活動の場を郷里の岩手県に移し、戦後は民俗学（特に民俗芸能分野）で多くの業績をのこしました。こちらは森口と調査を共にしていた郡司直衛氏が形見の品として大切に保管していた、森口自身の筆になるスケッチ帖です。

昭和23年（1948）に見たであろう太田村（現盛岡市）のさんさ踊りの花笠、昭和24年（1949）旧暦3月2日に訪れた御明神村（現雫石町）の節供菓子などが採録されています。

デジタルアーカイブには他にも多くの資料が紹介されています。展示室で見た資料について再度学ぶ、未知の資料と出会うなど、自由にお楽しみください。

(民俗部門 川向富貴子)



岩手県立博物館

IWATE PREFECTURAL MUSEUM

インフォメーション

〈令和7年6月1日～令和7年9月30日〉

お知らせ

◆夏休み期間中の臨時開館

7月28日(月)、8月4日(月)、8月12日(火)は、休まず開館します。

◆資料整理にともなう休館

資料整理のため、9月1日(月)～9月10日(水)は休館します。

◆敬老の日

9月15日(月)の敬老の日は、65歳以上の方の入館料を無料とします。

展覧会

●企画展「星にいがいを一宇宙といわた年代記」

令和7年6月14日(土)～8月17日(日)

会場：2階・オザワ工業ギャラリー(特別展示室)

いつの時代に生きた人たちが、現代の私たちと同じように空を眺めては、そこに様々な意味を見出してきました。銀河鉄道が走るイーハトーブ、いわて。人と宇宙の関わりを歴史をひもといてみると、私たちのふるさとの新たな一面が見えてきます。

◆展示解説会 当日受付・要入館料 いずれも13:30～14:30

6月14日(土)、8月9日(土)

◆企画展関連日曜講座 講堂 13:30～15:00 当日受付・聴講無料

6月22日 講師：宮澤 明裕 氏(宮沢賢治記念館学芸員)

7月13日 講師：目時 和哉(当館学芸員)

7月27日 講師：工藤 健(当館学芸員)

8月10日 講師：本間 希樹 氏(国立天文台水沢VLBI観測所長)

詳細は県博日曜講座の欄をご覧ください。

◆企画展関連ミュージアムシアター 講堂 当日受付・観覧無料

7月5日(土)「銀河鉄道の夜」

8月2日(土)「グスコブドリの伝記」

◆企画展関連映像プログラム 映像室 当日受付・要入館料

特別上映会「星よりも、遠くへ」

7月19日(土)、21日(月・祝)、

8月11日(月・祝)、16日(土)、17日(日)

いずれも14:00～14:45

◆星空観察会

8月2日(土)19:00～20:30

会場：当館芝生広場 要事前申込・参加無料

7月上旬～申し込み開始予定

詳細は当館ホームページをご覧ください。

●テーマ展「いわての酒造り」

令和7年9月27日(土)～12月7日(日)

会場：2階・オザワ工業ギャラリー(特別展示室)

南部杜氏を中心とした岩手の伝統的酒造りに着目し、歴史・製造技術、酒文化などについて展示・紹介します。

県博日曜講座

第2・第4日曜日 13:30～15:00 当日受付 聴講無料

当館学芸員等が岩手の文化や歴史、自然について解説します。

*展覧会関連講座

6月 8日 生命史をひも解く - 新第三紀・第四紀 -
講師：望月貴史(当館学芸員)

*6月22日 草稿から作品を見つめる
講師：宮澤明裕 氏(宮沢賢治記念館学芸員)

*7月13日 もうひとつの「星にいがいを」展 - 展示しそこねたものがたりたち
講師：目時和哉(当館学芸員)

*7月27日 世界の中の岩手 - 星と暦と人 -
講師：工藤健(当館学芸員)

*8月10日 緯度観測からブラックホールへ - 岩手から探る宇宙の謎
講師：本間 希樹 氏(国立天文台水沢VLBI観測所 所長)

8月24日 旧石器時代のモバイルツール「細石刃」が語るもの
講師：米田寛(当館学芸員)

9月14日 縄文人の移動と交流
講師：高木晃(当館学芸課長)

9月28日 モノ・コトが資料になるまでの物語り～民俗資料を例に～
講師：川向富貴子(当館学芸員)

夏休みの催し

◆ナイトミュージアム

令和7年8月8日(金)、9日(土)16:30～17:30(16:00までに入館)

要事前申込、要入館料

ふだんは見ることのできない閉館後の展示室を学芸員といっしょに歩き、新しい発見をしてみませんか？

定 員：20名(小学生～中学生とその保護者)

募集期間：令和7年7月16日(水)～7月20日(日)

専用メールアドレスへ申込、一度に5名まで予約可能です。

詳細は決定次第、ホームページに掲載します。

◆子ども向け解説 ～触ってみよう、ワンポイント解説～

令和7年7月23日(水)～8月8日(金)の平日 随時受付、要入館料

当館解説員が、手で触れられる資料を紹介します。参加希望の方は、解説員にお声がけください。

◆ワードクイズ

令和7年7月23日(水)～8月8日(金) 開館時間内随時

要入館料(高校生以下無料)

クイズをとこなから展示室をたんけん！クイズシートを手に入れてちょうせんしよう！

週末の催し

◆ミュージアムシアター

毎月第1土曜日 13:30～15:00頃 講堂 当日受付 視聴無料

6月7日 橋のない川(実写/132分)

7月5日 銀河鉄道の夜(デジタル映像/48分)

8月2日 グスコブドリの伝記(アニメ/85分)

※9月はお休みです。

◆チャレンジ！はくぶつかん

毎月第2・第3土曜、日曜 随時受付 小学生向け

チャレンジ！マークをさがして はくぶつかんをたんけん！

6月14日・15日・21日・22日 テーマ：草木(くさき)

7月12日・13日・19日・20日・21日 テーマ：星(ほし)

8月 9日・10日・11日・16日・17日 テーマ：暑い(あつい)

9月13日・14日・15日・20日・21日 テーマ：骨(ほね)

◆たいけん教室～みんなでためそう～ 毎週日曜 13:00～14:30

事前申込制 幼児(3歳以上、保護者同伴)・小学生10名程度

さまざまな遊びやものづくり、実験を体験してみましょう。

※全プログラム有料です(材料費代/プログラムごと異なります)。

※予約は専用メール(一度に3名まで)で受け付け、応募多数の場合には抽選を行います。詳細は博物館ホームページをご確認ください。

6月	1日 チャグチャグ馬コづくり 8日 カラフルクモづくり 15日 アンモナイトの消しゴムづくり 22日 まが玉アクセサリー 29日 ウォータードームづくり	8月	3日 ★化石のレプリカ 10日 ★天然石のフォトフレーム 17日 紙コップのあやつり人形 24日 スライムであそぼう 31日 いわてのどうぶつしょうぎ
7月	6日 ちぎり絵のうわ 13日 土器づくり 20日 ミニさんさだいて 27日 ★ミニさんさだいて	9月	9月はお休みです。

★印は午前(10:00～11:30)と午後(13:00～14:30)の2回あります。

利用のご案内

■開館時間 9:30～16:30(入館は16:00まで)

■休 館 日 月曜日(月曜が休日の場合は開館、翌平日休館)

■入 館 料 一般350(160)円・学生160(80)円・高校生以下無料
()内は20名以上の団体割引料金

※岩手子育てパスポート所有者で、パスポートに記載のお子様と一緒に来館された場合は、入館料免除となります。

※学校教育活動で入館する児童生徒の引率者は、申請により入館料免除となります。

※療育手帳、身体障害者手帳、精神障害者保健福祉手帳をお持ちの方、及びその付き添いの方は無料です。

岩手県立博物館だより 第185号 令和7年6月1日発行	編集 岩手県立博物館 〒020-0102 盛岡市上田字松屋敷34 Tel. (019)661-2831 / Fax. (019)665-1214 発行 公益財団法人岩手県文化振興事業団 〒020-0023 盛岡市内丸13-1 Tel. (019)654-2235 / Fax. (019)625-3595
-----------------------------------	---